

## 神様の愛を知る

ルカによる福音書15章11～24節

2023年1月15日  
松田 基子 師

聖書は世界の2,500以上の言語に翻訳され、世界中でもっとも読まれているベストセラーです。それはキリスト教信仰を導く正典です。私達が今使っています新共同訳聖書は、旧約聖書が1,502頁、新約聖書が480頁あり、約2,000頁にも及ぶ大きな書物ですが、何を伝えようとしているのでしょうか。それは一言で言うなら、

『神様の、人間に対する愛を  
知らせるための書物』

です。聖書の第1巻、創世記には、永遠を支配しておられる万物の創造主である神様は、時間と空間の中に世界を創造され、創られた世界を更に美しく成長させていくために、人間を創造されました。

神様は人間を愛し、御自身に聴き従って、世界を管理するように、人間に世界を委ねられたのですが、人間は神様に聴き従う事を拒み、自己中心、人間中心の生き方を選び取ってしまいました。しかし、そのように神様に叛いた事は、滅びへの道を歩む結果となったのです。ところが神様は、人間が叛いたからと言って、見捨てられることはありませんでした。反って、何と少しでも人類を救いたいと、御自身の人間に対する愛を、知らせようとなさったのです。人間が目に見る事の出来ない霊なる神様は、

『どうしたら人間に御自身の愛を  
伝えることが出来るのか』

をお考えになりました。それは神様と一つ心で、人類を永遠の罪の滅びから救いたいと願っておられる御子を、人間として世界に送り、神様の愛の実体を現されることでした。

そうして、人の世に生まれて来て下さったのがイエス様です。イエス様は遂には罪無き神の子の体に、全人類の罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かれ、全人類の罪を償い、贖いをなさるのですが、イエス様は人類の救いに向かって、神様の愛を人々に語られました。今朝

の聖書箇所には、神様の愛が、どの様な愛かが、記されています。

さて、イエス様は、神様の愛から離れた人間の姿を、二人の息子を通して示し、

『神様がどれほど人間を愛し、人間が神様の許(もと)に、帰って来ることを願って居られるのか』

を例え話を通してお話になりました。イエス様はルカによる福音書、15章11節から、次の様に話し始められました。

「或る人に息子が2人いた。弟の方が父親に、

『お父さん、わたしが頂くことになって  
いる財産の分け前を下さい』

と言ったのです。弟はどうも、外の世界に憧れる自由奔放な性格のようです。

『自分の思い通りに生きて行きたい。一日も早く都会に出て行って、知らない世界を体験したい。その為にはお金が必要だ。自分には親の財産を分けて貰える権利がある。そうだ、父親に言って、自分の貰うべき財産を貰おう。』

律法の規定では、長子は他の兄弟の2倍を得る事ができました。でも、彼は2人兄弟の弟ですから、3分の1を相続出来る事になります。

しかし、親の遺産と言うものは、父親が亡くなってから譲り受けるものです。それを、父親がまだ生きているうちに、

『財産の分け前が欲しい』

と申し出るとは、不遜です。父親に生かされて来た感謝も、尊敬もありません。自分の利益だけを考えた、父親さえ自分の願望のために利用する心しか持っていません。実は私達人間は、神様に対して、この弟息子の様な者です。神様は私達人間を、愛の受け取り手として、命を与え、両親を通して、この地上に祝福して送り出して下さいました。神様は天地万物の創造主であり、全被造物の所有者です。神様はその大切な財産を、人間を愛し、信頼して、その全てを託されたのです。

ところが、人間は、

『人間こそが地球の主人なのだ。自分達の思い通りにして何が悪い。神様なんていない。神様がいて、愛なる方なら、どうして甚大な自然災害が、病気が、飢餓が、貧困があるのか。何故、戦争を、暴力を、悪を止められないのか。この世界の現実が神様は居ないと言う事を証明しているではないか』と、多くの人々は反論して、神様の存在を認めようとはしません。

それは弟息子の様に、  
『親は子供の言う通りに財産を渡して自由に使わせてくれたらそれで良いのだ。うるさいことを言わずに引っ込んでおいてくれ』  
と言っているのと同じです。そんな人間を神様は罰して、人間を拘束されたのでしょうか。父親は財産を2人に分けてやりました。父親はそれだけの財産を築くために、どれ程苦勞してきたことでしょうか。汗水流し、苦勞を厭わず、身を粉にして財産を蓄えて来たのです。それは家族を愛し、息子達を愛していたからです。そんな大切な財産ですが、弟息子はその大切さが分からないで、さっさとお金に換えて、13節を見ますと、

**「遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを  
尽くして財産を無駄遣いしてしまった」**  
とあります。

神様は人類に全ての良きものを託されました。一人ひとりに、  
**「あなたは私にとって、掛け替えのない存在なのだ」**  
と、愛を注いで、命と使命を与えて、世に送り出されました。しかし、私達はここで大きな思い違いをしてしまいました。命も人生も、神様に従うために貸し与えられている事を認めないで、命も人生も、**自分のもの**だと思い込み、自分勝手に自己中心で、我が儘な人生を送って来たのです。それはあの弟息子が、放蕩に身を持ち崩している状態と同じです。

その事に早く気がつくべきです。弟息子は気が付いたのでしょうか。弟息子が父親の財産を使い果たしたところで、飢饉がやって来まし

た。弟は空腹に耐えられず、助けを求めました。16節には、

**「その人は彼を畑にやって、  
豚の世話をさせた」**

とあります。当時のイスラエルでは、豚肉は、異教の神々を拝んでいる異邦人の食べ物である事から、宗教的な理由から豚肉を食べることは許されていませんでした。ましてや、

『豚の世話をする』  
などと言う事は、

『宗教的に自分を汚す事だ』  
と考えられていました。それでも弟はそれ以外に生きる方法がありませんでした。飢えに苦しむ弟にとって、宗教は何の力にもなりません。彼は生きるために、豚の世話をしました。

16節を見ますと、

**「彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも、  
腹を満たしたかったが、食べものを  
くれる人は誰もいなかった」**

とあります。

いなご豆は、地中海沿岸に自生していて、高さ10メートル以上の高い木に、15センチ位の扁平な鞘に実を付けます。熟すと甘いそうです。豚など家畜の飼料に使われ、貧しい人々は食用にしていました。ここで考えたい事は、

『神様から離れた人間は、実は、誰も皆、心の核である魂が、**飢餓状態に置かれている**』  
と言うことです。魂の食べ物は、神様からしか得る事が出来ません。しかし、人間は、神様と断絶してしまっています。当然、魂は飢餓状態に陥っているのです。人は皆、いなご豆で魂の飢えを満たしています。

この世界が与えるいなご豆は、お金や物や、快樂や仕事や恋愛やお酒やギャンブルや薬物など、その人にとって誘惑となるものです。それらは今日の魂の飢饉の時代に、飢えた魂を満たしてくれるかのように、

**「おいしいよ」**  
と呼び掛けて近付いて来ます。皆、次々に飛びついて食べています。しかし、それらは皆、豚の食べるいなご豆です。真に人の魂の飢えを満たしてくれる物ではありません。それらは

一時、夢中になり、心地良いので依存してしまいがちです。しかし、そこに依存すればするほど、孤独と空しさは深くなるばかりです。本来神様に向かって創られた人間の魂は、神様の愛の言葉による以外に、その飢え渴きは満たされることはないのです。

弟は、自分の食べ物のあるかに気付きました。それと同時に、自分の愚かさに気付きました。父は苦勞して築き上げた財産を、惜しげも無く、自分に与えてくれたのに、自分はそれを湯水のように、浪費してしまったのです。そればかりか、あの父の子である事の素晴らしさを見失って、今、異教に仕える豚飼いとなっているのです。それは父を悲しませることでした。

弟息子は、

『ここには異教の為の豚に食べさせるいなご豆しかない。それは、自分が食べるべき物ではない。ここは異教の地、自分の居るべき場所ではない。自分が真に生かされる場所ではない』と言う事にやっと気付いたのです。

父の許から離れ、遠いとおい所まで来てしまいました。彼はいま、自分の居る場所が分かった時に、また、帰るべき場所も分かりました。

17節に、

「そこで、彼は我に返って言った。

『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。』

『お父さん、わたしは天に対してもまた、お父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にして下さい』と。

そして、彼はそこをたち、父親の許に行った」とあります。

弟は自分が帰るべき家、それは、

「父の家である」

事がはっきりと分かったのです。彼は父の家に向かって歩き始めました。歩きながら父に会って謝るべき言葉を何度もなんども繰り返

返しました。息子の愚かさが分かりながら、自分の立ち帰りを信じて、家を出してくれた父の大きな愛が胸に迫って来ました。

『あの父はきっと自分の帰りを待っていてくれる。』

その愛が胸に迫って来ました。彼は父の家に向かって必死に歩きました。

一方、その頃、父はどうしていたでしょうか。

20節を見ますと、

「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」

とあります。父は家から、遠く離れた所で息子の帰りを待っていました。そこに表れた息子は勢いよく家を出て行った時とは違って、変わり果てた憐れな格好をしていたのに、父は息子を見間違えることはありませんでした。父は弟息子が家を出て行った日から、彼が再び自分の許に帰って来る事を確信して待っていました。父には弟息子が放蕩に身を持ち崩し、身も心もボロボロになる事が分かっていました。

その時、きっと父を思い出してくれるだろう。

『どうか帰って来ておくれ』

と、父の心は、その一心でした。父は、弟息子が必ず本心に立ち返って、帰って来ることを信じて待っていました。その心の表れが、毎日息子を迎えるために、村はずれの家に通じる道迄出て行って、息子の帰りを待っていたのです。父がこんなに遠くまで迎えに来てくれたことに、弟息子は父の愛が心に迫ってきました。彼は自分にそれ程までの愛を注ぎ価値を与えてくれる父親に対して、素直に心から、悔い改めて言いました。

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。

もう息子と呼ばれる資格はありません。」

父はこの子供の、心からの悔い改めを喜びました。

父は以前にも増して愛する我が子として迎えました。そして、父親として出来る限り、精一杯、その喜びを表しました。

22節を見ますと、

「父親は僕たちに言った。

『急いで一番良い服を持って来て、  
この子に着せ、手に指輪をはめてやり、  
足に履物を履かせなさい』

と命じました。」

一番良い着物、それは晴れ着です。宴会に着るものです。指輪はこの父の息子である事の証しです。靴を履かせるのは、奴隷ではない徴です。父親はこれから、子供が生まれた日の喜びの祝宴を開くつもりです。息子は、自分を捨て、自分の手の届かない遠くへ行ってしまう、死んだも同然でした。その子が、自分の許に帰って来てくれたのです。それは真の親子の絆の始まり、愛の始まりでした。

父は弟息子の存在そのものが一番の宝でした。彼が生きていてくれること、自分のそばにいてくれる事、自分を愛してくれる事、その事こそが喜びだったのです。父親は喜びに溢れ、宴会を開いて村人にこの喜びを伝えずにはおられませんでした。彼は早速僕たちに、23節で、

「肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。  
食べて祝おう。この息子は、死んでいた  
のに生き返り、いなくなっていたのに  
見つかったからだ」

と言っています。

父の家では皆、喜びに溢れ、祝宴が始まったのです。イエス様はこの父親の姿を通して、**神様がどれ程、私達人間一人ひとりを、掛け替えの無い存在として、愛しておられるか**をお示しになりました。ところで或る人が言いました。

「人間の父親にはそんな人はいませんよ。  
自分の父親なら、息子の悪かった事を皆、  
反省させ、もう決してしませんと誓わせて、  
立派な息子になる事を条件に、家に入れて  
くれるでしょう。」

多くの親は、同じ扱いをするでしょう。親の愛も不十分であり、人は誰も人間の愛に少なからず失望しています。ですから、神様のその様な愛は信じられないのです。

神様の人間に対する愛は、何処に一番、

現されているかと言いますと、ヨハネによる福音書、3章16節に、

「神はその独り子をお与えになった  
ほどに、世を愛された」

と記されています。この例え話をされた**イエス様は**、その神様の独り子として、**神様と一つ心**で罪に滅び行く人間を救いたいと、人の子となってこの世界に生まれて来られました。そして、罪無き神の御子の**身体を差しだして**、全人類の罪を一身に負い、**身代わりの十字架に架かり**、**人類の罪を償い、贖われた**のです。それは父なる神様の、人間への愛を知って居られたからです。**神様はそれ程までして人間を救いたいと、人間を愛されました。**

この**無条件の愛は、無条件で信じる**とき、わかるのです。神様の愛、キリストの愛が胸に迫って来るのです。神様はどなたの上にも、この愛を注ぎ、弟息子の様に、父の懷に、神様の懷に飛び込んで来る事を待っておられます。

お祈りをいたします。

私達人間一人ひとりを限りなく愛し、命と使命を与えて、世に送り出して下さった天の父なる神様

私達は、神様の愛が分からず、自分勝手に生きて神様に叛いてきましたが、イエス・キリストが人となって、この世に生まれ、神様の愛を示すために私達の罪を負い、十字架に架かって罪を贖ってくださったことにより、御救いをお与えになりました。

私達を、神様のこの愛を、更に深く知る者とならせ、神様の御愛に應えて生きる者とならせて下さい。

私達の救い主、イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。